

羽柴 弘先生の思い出

麻 生 英 臣

(会員・東京世田谷)

今日の佐伯史談会活動の充実ぶりを思います時、そこには永年に及ぶ羽柴先生の血のにじむ、ひたむきな御尽力があったことを誰一人として認めない方はいないとはつきり申せましよう。

一昨年の春頃よりも相当なお年をめされた先生のことが心配になっておりました。毎月送っていたくあの手造りの会誌に何やら「ローソクの燃えつきる最後の「光」にもなぞらえられる先生の最後の気迫をはつきり感じ入っておりました。

昭和五十五年春、一時帰省の折、先生に電話でお話のできたのが遂に私にとって最後の会話となりました。永らくのガリ版刷りの会誌がいよいよ姿を消し、活字印刷本時代に移ったことで永年の先生の御苦労にお礼と讃辞を述べさせていただきます。

「先生、今後はもうお手製のガリ版刷り会誌の発行はありえないのですか」「え、わたしも年をとって視力

が衰え鉄筆を持つことができなくなった」と淋しくおっしゃられました。

この電話で私は先生がお元気なうちにまだまだやっていたかねばならない案件があり、もし先生にできなくても地元史談会員の誰かが引継いでやって欲しい事柄の申入れを致しました。県文化課があと押ししてあげようとしている佐伯山手地区の歴史的街並み保存計画、県南地域観光開発計画につき地元史談会が堂々と意見具申すること、又国木田独歩生誕地である千葉県銚子市の教育委員会との情報交流化や佐伯市役所当局宛に史談会活動への特別補助予算枠の申請……等々のことなどでしたが、遂にこれらの課題はそのまゝになってしまいました。

まさか先生がそんなに衰弱されておられるとは知らず、気軽に矢つぎばやに私の思いつくまゝのことを手紙に託したりしたことが几帳面な先生にはことごとく返事、回答の手紙を綴らせてしまう結果になってしまい、この私の行いが先生の死をいそがせる大きな原因の一つになったのでわないかと今にして思い当る気がしてならず大変なことをしてしまったと痛感して居るところです。

私はたしか昭和四十四年頃から史談会員に加入させて

いただき、ずっと会誌の拜読を続けさせていただき、佐伯文化に対する豊かな認識と愛郷スピリットをもたらしていただいた。その幸せな過程で先生とは四十通程の往復書翰と十数回の電話のやりとりがありました。先生との直接面談の機会はあとにもさきにも昭和四十六年の夏一回かぎりのことでした。当時先生は佐伯鶴城高校の図書館長をなさっておられました。事前連絡もせず、突如久しぶりの母校にはじめての御挨拶に参りました時、先生は図書館部員を指導して蔵書の配置替え作業をしておられました。頭にはほこりよけの手ぬぐいをほうかむりにして忙しくしておられゆっくりお話をすることも出来ませんでした。その初対面の印象は小柄な窮屈で古武士然とした風貌は、鋭い目つきといがみつぶした表情で引きしまっており、何やら頑固一徹の爺さんに受取れました。ところが私の差し出した菓子箱に「三時のお茶で、生徒達と一緒にいただきますよ」とおっしゃってやさしい童顔の表情にかわったのを思い出します。程々に話を終えてお別れする頃になった時、私に南面の窓を指され「ここから見えるあの灘の山並みは独歩の愛した風景であるが、昔も今もちっともかわっていない」とし

ばらくその方を眺められていられました。その時、何かにつけ、何の風景にしても佐伯のことを歴史とのからみで眺められる方だなあと感じ入りました。

佐伯に生れ、一生佐伯で過ごされた先生は最近の市内の急激な街並みの変化に心配するものがあつたらしく、情緒豊かな古き良き時代の佐伯をほうふつさせる市内風景はことごとくスナップ写真におさめておられることを綴って来られたことがありました。私の実家のアルバムの中に昭和初期の市内風景写真があつてそれをプレゼント致しました時など、わざわざ現在その撮影地点がどう変ったかと気になられたらしく、一つ一つ訪れては写真におさめられたとありました。戦時中、佐伯市民が寄付金を集め佐伯航空隊に零式戦闘機を一機寄付したことがあるらしく、「佐伯市民号」と命名された零戦の写真を差し上げました時など、非常にめずらしい写真だとしてその後この機の運命はどうなったのだろうか、わざわざ手紙をよこして下さいました。

先生の想い出は色々ありますが、先生に学んだことは城下町人特有の律義さ、筋を通す姿勢のりっばさ、行動面では、ひとたびこれとかみついたら死ぬまで離さない

ことが最後の勝利者になれるということを身をもって示して下さったということに要約されましよう。ありがたいございました。心より御冥福をお祈り申し上げます。

羽柴 弘年譜

明治三十七年（一九〇四年）

〇歳

9・19 南海部郡中野村（現本匠村）宇津々に生まれる。父（繁太郎） 母（イチ）

明治四十二年（一九〇九年）

五歳

8・6 暴風雨中、水車の見廻りに行き母が増水した激流に流され、父はこれを助けんとして共に濁流に吞まれる。

七日後父は木立に、同じ日に母は上浦町夏の海岸にて発見される。

孤児となり弟道明と共に母の実家にて養育される。後羽柴家の主家にて養育される。

明治四十四年（一九一一年）

七歳

4・1 南海部郡中野村立中野尋常高等小学校に入学

大正 八年（一九一九年）

一五歳

3・26 同校高等科第二学年卒業

4・5 中野村役場給仕の職に就く

大正 九年（一九二〇年）

一六歳

4・10 大分県立師範学校本科第一部入学

大正一二年（一九二三年）

一九歳

この年キリスト教の洗礼をうける。

大正一三年（一九二四年）

二〇歳

3・19 大分師範学校本科第一部卒業

〃 小学校本科正教員免許を受く

3・31 中野尋常高等小学校に勤務

4・1 一年現役兵として大分歩兵第七二連隊に入隊

大正一四年（一九二五年）

二一歳

3・31 東雲尋常高等小学校に勤務

大正一五年（一九二六年）

二二歳

4・30 東雲農業補習学校助教諭を兼任

東雲青年訓練所指導員を兼任

昭和 元年（一九二六年）

二二歳

12・31 中野尋常高等小学校に勤務

昭和 四年（一九二九年）

二五歳

4・31 下堅田尋常高等小学校に勤務